

吹田市立第一中学校の創立と

在学三年間の想い出

十八回生 寺澤 美代子



教育制度の変遷が人々の進路やその後の生活に、大きな影響を与えることは周知の事実であるが、とりわけ、戦後に導入された六・三・三制のあまりに急な実施は、最も大きな変化をもたらしたものであった。国民学校に入学し、国民学校より卒業した唯一の学年（一年生の十二月に開戦、五年生の八月に終戦）であった我々十八回生も、否応無しに教育制度の変遷による荒波を受けて過ごすことになった。ここでは、吹田第一中学校開校前後の事情や、今では考えられないような不自由な環境の中で過ごしながらも、吹田一中の基礎を築くことになった三年間

の日々を振り返ってお伝えしたいと思う。

千里山会館での自主学習

昭和二十二年三月に国民学校を卒業した我々は、六・三制の実施に伴って、期待していた従来の中学校や女学校への進学が不可能になった上、新制中学発足の準備が整わず、いつ開校されるのかわからないまま自宅待機の日々を過ごしていた。

このような状況を見かねて、千里山会館での自主学習の指導を始められたのが、同期生和田猛郎さんの父上で当時の大阪外事専門学校（大阪外大を経て、2007年大阪大学に統合）フランス語学科教授の和田誠三郎先生であった。新生日本を背負って立つべき子供達がぶらぶらと無為に過ごしている状況を憂い、何とかしなければと思われたのだと思う。豊敷きの広間に机を並べたいわゆる寺小屋式教室で、私達は英語より先にフランス語に接することになった。新制中学開校までの十日間程だったと思うが、フランス語のアルファベットから簡単な単語の発音を繰り返し練習した。とに

かく、子供達に学習習慣を付けておかねばという和田先生の強い思いが込められた指導だった。一方私達の方は、勉強というより友達と会える機会を楽しんでいたのかも知れない。しかし、繰り返し発音練習したラ・メゾン、ラ・ターブルなどの発音は、今でも不思議としつかり頭に残っている。

今思い返して見て、当時、自主学習のことが、どのように連絡され、生徒が集められたのだろうかと思う。多分口コミであったと推測されるが、口コミで母親達に情報が伝わり、子供達が集められたとすれば、いかにも千里山らしい出来事だったと思う。先の見えない不安定な一時期に、貴重な思い出を下さった和田先生の熱意とご指導に感謝の念を新たにしている。ちなみに、和田先生は、吹田第一中学校の開校後、短期間（S22・5・10）23・4・30）だったが、講師を勤められた。

吹田市立第一中学校の開校

吹田市立教育研究所、研究紀要第45号に『中学校

校舎・教具・教材・消耗品、そして教員などの確保の目安も全くなく文字通り「何もない中からの出発」であった』（以後『**内の文言は、前述の研究紀要45号よりの転載**』と記されているように、六・三・三制の実施は、G・H・Q（連合国軍総司令部）の方針とは言え、市町村の財政難から困難を極めるものであった。『中学校は独立校舎を理想とし、その設置義務は市町村にある。』（昭和二十二年一月閣議決定）という国の方針の実現には程遠く、吹田市では、『当面、小学校の空き教室を活用する

方策により第一中学校・第二中学校・第三中学校を小学校内に併置し仮校舎として四月一日に創立した。』同月二十一日に、吹田第一小学校講堂において三校合同の開校式が行われ、同日を創立記念日として吹田第一中学校も発足するに至ったのである。



吹田一中第一学年の日々

昭和二十二年四月二十二日の開校式のあと、二十八日から吹田第一小学校内西側の木造二階建て校舎で授業が始まり、我々は、千里山から当時の千里山線吹田駅まで電車通学をすることになった。

学内は二年年から成り、『第二学年は二学級編成で天道高等学校第一学年修了者の一部と豊津尋常高等学校高等科第一学年終了者』であった。我々の学年は、六・三・三制のもとで新制中学校に最初に入学した学年であったが、二回生となっているのは、第二学年に編入されていた方々が、第一回卒業生となり、我々の学年は第二回卒業となったからである。

第一学年は、千二小・吹二小・豊津小の卒業生から成る五学級編成だった。小学校に同居の仮校舎に入つて、我々中学生は肩身の狭い思いだったが、小学校側も運動場の使用の面などで不便な思いをされていたことと思う。

新しい教育制度の急な実施のため、全国的に教員が不足し、教員の確保も困難な状況であったが、初代校

長には、旧製の府立北野中学校で長年国漢を担当しておられた平田泰雄先生（S22・4・1〜24・3・31一中賛歌の作詞者）が、就任され、二年後には、同じく北野中学で長く英語を教えておられた水鳥喜平先生が就任された。

当時の教諭や講師の先生方には、後に吹田市長となられた山口富次郎先生、後に芸術院会員・文化勲章受章者となられた書道の村上三島先生、垂水神社宮司竹内梅吉先生、後の天満宮宮司 寺井種茂先生、後の相愛音楽大学教授仲芳樹先生（一中賛歌の作曲者）といった立派な先生方が多数名を連ねておられた。一方、若い先生方は、旧制高等学校や大学を卒業されたばかりの方や、大学在籍中といった方で学歴や職歴はまちまちだったが、我々新入生は、開校後まだ日の浅い新制中学の校内で、若い先生からは若々しい元気なエネルギーを感じ取っていたと思う。



旧校舎の渡り廊下 昭和38年(1963)

本校と分校に分かれた二年生の日々

『翌二十三年三月、高等小学校として終了した二年生については卒業となり、四月に新に新入生四八〇名（七学級）をむかえ、教室不足のため第三小学校に更に分教場を設けることとなった。』当然学年ごとに分かれるとの予測に反して、新二年生では、二学級が分校へ、三学級が本校に残ることが決まり、私は分校へ通うことになった。

どうしてこういう事態になったのか、当時初代のPTA会長を務めていた父（久野陸一）が「学年ごとの配置では生徒の社会性が養えないから、それぞれの学年を分割・配置すべし」というG・H・Qの指導方針による決定であるとの説明を受けたと話していたのを覚えている。

先生方も、本校・分校勤務と別れた結果、当然のことながら、職員会議の開催や各種の連絡上の不便を経験されたと思うが、生徒の側でも、学年としての一体感に欠けたのは事実で、未だに本校出身だとか、分校出身という言葉が使われている。自治会活動の集会

や、文化祭などの行事練習には、分校から本校に行かねばならず、分校からの到着が遅いと大変に叱られたこともあった。分校から本校まで、まともに歩いて三十分は掛かったと思う。

とにかく、我々分校生は、千里山線の吹田駅から本校のあった吹田第一小学校の校庭を通り抜け、旭町など吹田市内の大通りを横断し、京都線を走る電車の見えた相川駅に近い吹田第三小学校まで徒歩通学した。今考えてもあの遠い道のりを、文句も言わずによく歩いたものだと思う。

その当時、生徒会の組織作りや、民主的な生徒会活動についての講演会やフォークダンスの講習会などがG・H・Qの主催で何度か開かれ、各中学校からの代表が集められた。私もそうした講演・講習会に何度か参加した経験を持つが、六・三制に対するG・H・Qの影響力の大きさを、中学生なりに強く感じたことであつた。



空から見た旧校舎 昭和39年(1964)

島学園千里山中学校校舎への

移転で迎えた三年生の日々

◇ 移転後の校内事情 ◇

昭和二十四年四月、三年進学と共に、私達は私立千里山中学校が使用していた校舎に移ることになった。二年生を分校で過ごした私にとっては、三度目となる校舎移転だった。吹田市の資料によれば、『小学校での間借り、その上本校と分教場での不便な施設状況を解消すべく、当時吹田市佐井寺に経営されていた私立千里山中学校が経営難を理由に吹田市に買収してほしいとの申し出があったので校舎不足の吹田市もこれに応じることになった』とあるように、困難な交渉の過程を経て、前年十二月二十四日に、吹田市と島学園千里山中学校理事長島安兵衛氏との間で、学校土地建物等の売買契約が成立していたのである。我々も「晴れて独立校舎へ」と言いたいところだった

が、現実には二つの学校の同居で、私達の二階の教室から見える向かい側の校舎には、別の学校の人達が見えるという状況だった。昭和二十三年の新制高校の発足に伴って千里山中学校は千里山高等学校となり、生徒もそのまま在籍していたわけで、吹田一中が移転しても、一中が使える教室の数が限られていたのが実情だった。

ここに転載する昭和二十四年七月三十日付一中新聞五号の記事は、新聞部顧問亀田芳一先生と四人の新聞部員が吹田市役所を訪れ、二つの学校の同居によって生じている不都合を解消するための吹田市の施策について小川助役に問い正しているインタビュ記事である。この記事には、当時の二部授業への不満、校舎の破損状況のひどさ、限られた教室や運動場使用の際の制限に対する不満がよく表れている。

一中新聞より転載のインタビュ記事

二部授業解消は新学期

問 本日私が訪れましたのは外でもございません。校舎問題の前途であります。五月末に解消するといっていた、二

部授業問題に対して市役所は、その責任に対して、如何なる対策をおたてですか、可能性の問題をお聞きしたいと思います。

答 諸君のお困りはよくわかっていて、地ならしその他材料の為、現在迄延びたのはいたし方ない現在、旧櫻蘭の方に十三教室を増築中で、工事は急速に進展しているから決して心配して下さるな。少なくとも二学期から二部授業は解消されるだろう。

問 そうなると本校分校は必至ですか、前の生徒代表にはどうおっしゃられたが？

答 今のところそうなるよりしかたがないと思う。将来千高校舎は一中のものになるのは当然だが現在の所千高は併設中学共十七学級で、運動場が狭いし、かつ運動部が活躍しているし、今急にある校舎からは千高を離れさせることはどうかと思うので、まず一中に行ってもらいよりしかたがない。

問 運動場のせまいのは一中でも同じですよ。そんなことは理由になりません。次にある人から聞いたんですが此の前

助役さんが千高へ行かれた時千高は絶対桜蘭の方はやらな

いとおっしゃったそうです。事実ですか？

答 そうなことは学校内で話し合っていて欲しい。こちらからどうせいとも云わない。

校舎修理に対する市役所の責任追及

問 ようやくにして気を取りもどした我々記者団は破損校舎の修繕について一問をかわした。

答 いやそんな事は云っていない。云ったとしても近いうちに千高を桜蘭の方へはやらないと云った程度でしょう。と軽く鋭砲をさけて、さらに続けて、

P・T・Aからもよく苦情が出るのですが、此れも千高のP・T・Aとよく話し合って合理的に解決して欲しい。若し話し合いがつけば市役所は話に乗りに出しましょう。教室に面した所に入口のある千高部屋があつて授業中下駄をはいて入って困る。

問 そう云う事は学校内部で解決して欲しい。

答 次に新運動場は千高の為に改良されたのですか。

問 どちらの為に思っていない。

答 千高はあそこに野球場立入禁止なる立札を立ててありますが、我々は千高の為に市役所の特別サービスされたものと思っていました。

問 そんなことは学校内で話し合っていて欲しい。こちらからどうせいとも云わない。

問

丘の上にある四教室の壁は破損し作品展示さへも張れない状態です。又一年のある組では雨が降ると水がどんどんもって屋根があるのかわからない状態です。市役所は修繕すると云っているが一体何時するのですか。

答

それらについては、こちらで設計中で予算百九十数万円もすでに市会を通過し、設計の終わり次第に工事に着手するが、雨もりの方は雨期にあつたのでそれは仕方なかつたのです。この事については建築課長を呼びましょう。

ここで助役さんは、建築課長を呼んでこられた。

助役

此の方が建築課長さんです。

記者

どうぞよろしく。

問（建築課長）

この前の視察でよくわかっていますが何しろ雨期で工事は不可能だったので、此の休中には物理室を女子便所に、新に化学室を作ったり壁をぬりかえたり、天井をなおしたり、必ずやります。雨もりは現在樋が落葉でふさがっているので雨水の排水に特別考慮しましょう。どうか安心して勉強して下さい。

◇ 二校同居の解消に向けた吹田市の取組 ◇

一方吹田市ではこの間に、吹田一中の独立校舎の確保と新千里山高校の生徒の受け入れのために新しい府立高校の建設を求める誘致運動を展開し、昭和二十五年開校の段取りにまで漕ぎつけていた。

しかし、千里山高校の生徒の受け入れ問題はうまく進まず、暗礁に乗り上げた状態になっていた。この事態を打開するために、吹田市教育委員会が府教育委員会と交渉を重ねた結果、府下全域から通学していた千里山高校の生徒を、それぞれの学区の府立高校に編入学させることに成功した。このような経緯を経て、二校同居の問題は解決し、吹田一中が独立の校舎を得る道が開けたのであった。

◇ 独立校舎を得て ◇

我々吹田第一中学校の生徒が、いつ頃から独立校舎を得て制限なしに校舎を使用できるようになったのか、

私の記憶も定かでないが、多分三年生の二学期から同居も解消し、運動場も校庭から一段下がった運動場と道を隔てた第二運動場と広く使えるようになっていたと思う。

二代目校長（注）として水島喜平先生が着任（S24・10・31）36・3・1）された頃からは、校内の雰囲気も落着き始め、吹田一中としての一体感を感じるようになっていた。こうした月日を経て昭和二十五年三月に、私達二期生は吹田第一中学校を卒業して行った。

（注）吹田市の資料によれば、昭和24年より千里山高校を市に移管し、吹田市立千里山高校として経営をすることになった（結局一年だけ）。この間、吹田市立千里山高校吉田安治郎校長が吹田一中の学校長を兼ね（S24・3・31）24・10・31）『高校の教頭と一中の教頭が並存し職員室も二つに仕切ってそれぞれの職員が勤務するという全く変速的な学校運営が行われた』時期もあつた。

今にして思えば、私達の中学生時代は、校舎も設備も不自由な中での日々であつたが、当時はまだまだ物

資の不足を感じる世の中だったので、特に不満も感じないで過ごしていたと思う。逆に、戦時中の体験も含めて大変な時代を無事に過ごし、色々と得難い経験をさせて貰つたことに感謝の気持も持っている。

吹田第一中学校は、昭和三十九年七月に千里山西二丁目の新校舎に移り、発展の歴史を重ねている。平成八年には創立五十年を祝い、本年は創立六十六年目に当たる。私達が過ごした創立当初の三年間も、その後の歴史を築く基となつたと思うと感慨深く感じる。この記事を通じて、創立前後の数年間には、多くの方々のご苦労や尽力があつたことを知って頂ければ幸いです。

あとがき

今回の原稿を書くに当たって色んな資料にも目を通した結果、六・三・三制の急速な実施に伴う財政難はもとより、困難な諸問題の多さに対する認識を新たにすると共に、吹田市の教育関係者の並々ならぬご苦労に頭の下がる思いであつた。

一方、将来廃校に向うという現実を突きつけられた

千里山学園在籍者のご心情は、察するに余りあるものであったろうと思う。この間の事情について、当時千里山高校二年生で生徒会長を務めておられた林晴彦様にお伺いしたことがあった。林様のお父上、林良二氏は当時吹田市市会議員で議会の要請を受け、千里山学園の校舎買収の任に当たっておられた。頂いたお手紙には、売却を進める側と、学園の存続を願う側に立ってお互いに辛い葛藤があったと記されており、心の痛み思いであった。(林晴彦様はその後平成二十二年にお亡くなりになったと伺い、心よりご冥福をお祈り申し上げると共に、お手紙を下さったご親切に対して、改めてここに感謝の念を捧げたいと思う。)

記事の中に転載した「二中新聞」は、同期生の方が大事に残しておられたもので、一昨年箕面で開催された二期生の同窓会の折に、コピーして出席者全員に配って下さった。新聞は四頁から成り内容も豊富で(学校だより、時の言葉の解説、論説、生徒の作文、研究作品、インタビュー記事など)、千里山中学の校舎に移ってまだ落ち着かず、部室の使用も限られていた頃に、新聞部がこれだけの新聞を作るために立派な活動をしていた事実に関心したことであった。

昭和二十四年七月三十日

二部授業解消は新学期
新聞部市役所を訪問

府立高校設置可能性
一中一校制實現

市役所の責任追及

論説
校長先生の善處を要望

投書欄

横達の年中行事